

浜松市 教頭会 会報 第44号

発行 令和2年11月6日

編集 浜松市教頭会会報委員会

連絡先 TEL053-542-0062

浜松市立引佐南部中学校 大城定則

新任校長随想

「笑顔」からはじまる学校づくり 学校は地域の宝物

浜松市立下阿多古小学校長 中野 主税



校長職を拝命して6か月が過ぎようとしています。4月初旬からの休業、それに伴う様々な対応、何もかもが初めての経験の中で、先輩の校長先生方に支えていただきながら何とかここまで勤めることができました。

想定外のことが起こる、この大変な状況の中で、ピンチをチャンスに変えていけるよい機会と捉え、「子供を中心に据えた教育活動」を進めていきたいと考えました。想定外の事態を乗り越えるには、地域と学校、家庭と学校、子供と教職員、教職員同士の「信頼」が力となります。こうした「信頼」を得るための努力を地道に積み重ねながら、地域ぐるみで「夢に向かい 共に学び 行動する子」(学校教育目標)を育成していきたいと考えています。

その際に、大きな支えとなるのは教頭の存在です。校長となり改めて実感したのは、「教頭の存在の大きさ」です。本校にも、前年度からのストレスのないつながりを大切にしながら、校長が的確な判断をすることができるよう、多くの正確な情報を校長に伝えて補佐する頼りになる教頭がいます。校長の思いを汲みながら、「温かくてほのぼのとしたやさしさに包まれる職員室」の雰囲気づくりに尽力してくれています。よい雰囲気の職員室から先生の「笑顔」が生まれ、それが子供たちの「笑顔」につながっています。

昔から阿多古川を泳ぐ鮎にちなんで「あゆっ子」と呼ばれてきた子供たちが、「ありがとう」と「笑顔」で言い合える場を、地域の皆さんと共にとくさんつくっていくつもりです。教員としてのスタートを切った学校に再び勤務する幸せを日々感じながら、4月に「お帰りなさい」と声を掛けてくれた当時の保護者や教え子の応援を力にして、地域の方々の思いを大切にしたい学校づくりをしていきたいと考えています。

私は、「人の心を動かすのは、その人に対する思いの多さ」であると信じています。子供たちや教職員、保護者や地域の皆さんに対する熱い思いを日々「笑顔」で発信し、温かくてほのぼのとしたやさしさにつつまれた地域、そして「地域の宝物である学校」を地域ぐるみでつくっていききたいと考えています。

浜松市教頭会の皆様、学校や地域によって実情は異なり、当事者でないと分からないような悩みや苦しみを多く抱えていらっしゃると思います。自分もそうでした。そんな時に力になったのは、身近な部会・中学校区の教頭先生方や気の許せる先輩・仲間でした。1人でも自分の思いをじっくりと聴いて共感してくれる方がいるだけで救われます。どうか、心身ともに健康で御活躍くださいますよう、心から願っています。

今も教室から子供たちの元気な声が聞こえてきます。「子供に罪はない。なりたくてそうなったわけではない。」との原点に立ち、常に「子供にとってどうか」という視点を大切にしながら、今日も明日も、共にがんばりましょう。

教育雑感…情を持って接する。思いを持って導く。

浜松市立可美中学校 校長 北村 健治



県立中学の教頭経験しかない私が浜松市の教頭会会報に新任校長として随想を載せる…おこがましいことだと思う。申し訳ない気持ちである。しかし、引き受けてしまった以上、私なりの管理職考や教育観について雑感を述べてみたい。

20年程前、文科省の海外派遣教員として英国ロンドン補習授業校に3年間勤務した。自分は教諭だが授業を行わない校舎長(教頭格)という立場で様々なマネジメント業務を行った。30代半ばで管理職の擬似体験である。担当した校舎に通う子供たちは、小1～高3で1200人をこえていた。次から次へと問題が発生し、その対応に追われる毎日だった。自分より年上の職員に対して、言葉を選びつつ指導助言をしていくのが難しかった。…とはいうものの、部活動はなく、行事も少なかったので、週休日は業務から一切離れ、同僚と格安ゴルフを楽しんだ。澄んだ空に真っ直ぐ飛んでいく球を見るのが好きだった。真っ直ぐ飛ばない時は草むらでよく球を探した。お気楽な管理職である。

日本の学校の管理職は大変だ。政令市浜松の教頭は激務だと感じる。休日出勤しなければならぬ時もある。「職員室の担任」として朝から晩まで常に忙しい。本校の教頭も、あらゆる学校業務の司令塔として毎日東奔西走している。コロナ禍の中で、校舎のあちこちを消毒している姿を見ると本当に頭が下がる。残念ながら、働き方改革からちょっと離れたところに教頭はいる。(なんとしても変えたいところである。)その一方で、教頭のフットワークは学校職員の勢いや機動力に結びついている。だから、可美中職員の動きはとても軽やかだ。生徒を変える力を持つ集団だと思う。

教頭の仕事は「人と人の間に入る」「あらゆるところに目を配る」「半年先を見通す」「情報発信の要となる」と言われる。教諭時代に出会った教頭は、皆個性的な方ばかりで、どなたからも大きな刺激を受けた。放課後の職員室で私のたわいもない悩みごとに耳を傾けてくださった方。労をねぎらい、才を認める巧みな術を何気ない会話にいつも盛り込んでくださった方。人を信じ、任せることの大切さを教えてくださった方。先走る私を諫め、温かい言葉や時に厳しい言葉をかけてくださった方。市教委や業者との交渉をいかに円滑に進めるか、身をもって教えてくださった方。先輩方の卓越したマネジメント力を傍らで目にし、職場に渦を創る人間力に圧倒された。校長になって特にそう感じるのだが、結局、どんな仕事をしたいかよりも「何を目的に誰と仕事をしたいか」の方が大切だと感じる。人との出会いによって、人は刺激を受け、成長していく。

本校の学校教育目標は「互いの成長を認め合い切磋琢磨する生徒」である。「切磋琢磨」させるためには適度な刺激が必要である。時には白黒をはっきりつけるような勝負の緊張感を与えたり、個や集団に対して的確な評価をわかりやすく伝えたりすることが肝要だ。三つの重点目標「バランスのとれた授業」「感動ある学校行事」「夢中になる部活動」をどのようにコーディネートしたら、生徒の主体性を育む形になるか。職員集団の英知を結集して、新しい教育課程づくりに取り組んでいく。

このコロナ禍で必要に迫られ、教育現場のIT化は少し前進した。だが、新しい技術や道具の使い方を身につける以上に「教える気持ち」や「教師自身が自分の言葉で考える姿勢をもつこと」が大事だと感じる。年度の初め、可美中職員に教育方針を支えるマインドセットとして、「情を持って接する。思いを持って導く。」を掲げた。私自身、生徒や職員に対して、この気持ちで向き合っているかを常に問いかけ直し、日々行動していきたい。

特集

コミュニティ・スクールの 現状と課題について

浜松市教育委員会 教育総務課 指導主事 小川誠司



本市では、学校、家庭、地域が連携・協働して学校運営に取り組む、学校運営協議会を設置した学校（コミュニティ・スクール、以下「CS」という。）について、平成28年度から推進モデル校を指定して取組を試行、成果や課題等の検証を行い、本格導入に向けた制度設計に生かしてきました。そして、本年度は51校（48協議会）が法に基づくCSとなり、令和6年度までに全市立小中学校がCSとなることを目指しています。

本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、年度当初に計画していた協議会が中止もしくは延期を余儀なくされました。しかしながら、学校運営を進めるに当たり、基本方針の承認は欠かせません。臨時休業が明けると、多くの学校では、感染症対策を講じつつ、協議会が開催されていきました。それぞれの協議会の様子を拝見し、改めて本市の多様性を実感しました。学校種や学校規模、地域により、学校や地域の課題、学校が必要とする支援は様々で、「これが学校運営協議会の形だ。」と言える画一的なスタイルはなく、運営協議会も千差万別であることが分かりました。コロナ禍で、協議時間を十分に確保できず、思うように熟議ができていない協議会も見受けられますが、他県の先進地域の様子を見ても、CSが安定、充実するには5年、10年掛かっています。すぐに成果を求めず、じっくりと取り組んでいただければと思います。

また、本市のCSでは、学校と地域をつなぐ学校支援コーディネーターと、事務的な役割を担うCSディレクターを設置しています。各学校にはCS担当教職員の選任をお願いしていますが、実際には教頭先生が担っているところが大半で、事務処理の負担も感じておられることと思います。保護者や地域住民による学校支援が充実してくると、教職員の負担軽減の効果が見えてきますが、仕組みが軌道に乗るまでは教頭先生のお力に頼るところが非常に大きくなっています。

コロナの影響により、5月に予定していたCS担当教職員研修会は中止しましたが、学校支援コーディネーター研修会は2回開催しました。毎回、グループ協議を行っていますが、コーディネーターの方たちは、自校の取組や活動の仕方について熱心に情報交換をしています。「このwithコロナ社会において何ができるのか」、コーディネーターとしても学びを続けています。こうした学校支援コーディネーターやCSディレクターと連携を取ることによって、教頭先生に掛かる負担は徐々に軽減されていくと考えます。

この7月から9月にかけて、来年度からCSとなることを検討している約40の学校を訪問させていただきました。「どのようなCSにしたいのか」、「そのためにどのような委員の人選をしたらよいのか」、「学校支援コーディネーターはどのような人が適任か」といった内容について、校長先生や教頭先生と打合せをさせていただいています。PTAや自治会、青少年健全育成会等、様々な方と学校をつないでいる教頭先生の日々の目、情報が校長先生の助けとなることは間違いありません。また、学校運営協議会を軸として、これまでPTAや健全育成会等で行ってきた学校支援活動の見直しを図ったり、各会合の整理や統合を図ったりしていく良い機会であると考えます。教頭先生だからこそできるお仕事ではないでしょうか。本市の全小中学校がCSとなり、『地域とともにある学校づくり』を推進するとともに、働き方改革の一手となることを願っています。

新任教頭随想

変わることと変えていくこと

浜松市立入野中学校 松下 直由



久しぶりの学校と職員室の雰囲気や生徒との対面等これから始まる学校生活に、嬉しさと程よい緊張感を持って4月当初を迎えました。そして、始まって直ぐの約2か月の臨時休業でお預けをもらった気分になりました。5月下旬に再開した際、生徒の学校で友達と会って喜ぶ姿から、学校の良さをじわりと感じました。これまで当たり前と考えていた、学校には生徒がいて教師がいることがとても貴重なことに感じました。

コロナ禍で生まれたマスクの着用、検温等の健康管理、ソーシャルディスタンス、消毒等々の感染防止対策は、これまでの生活に変化をもたらしています。その新しい生活習慣は、当然ながら学校の教育現場にも入ってきて、対応によって変わることを余儀なくされた部分があります。学校行事の延期・中止の判断や内容の変更等は、これまでと比べて驚くほど短期間に行われました。校内体育大会や文化発表会も例年と変わる必要がありました。9月に開催された校内体育大会は、生徒の活動がこれまでと制限される中、これまでの伝統を生かしつつ、生徒と教師が工夫を凝らすことで、今しかできない形を最大限表現できました。地域と保護者の理解や協力があって開催できたことも感謝ですし、活動する生徒や教職員の姿から「やってよかった。やれてよかった。」と実感しました。

これまで気にすることはなかったのですが、立場が変わり、教職員の勤務時間超過が気になります。単純に声をあげるだけではままならない状況であり、業務の効率化のためにも学校全体でカリキュラムマネジメントを行う必要があります。日常を少しだけ変えることができたらと思いますが、結局のところ、皆の協力で学校がまわっていることに感謝し、甘えている毎日です。学校がさらに One team となるよう自分なりに精一杯尽くしていこうと思います。



初めてを生きる

浜松市立初生小学校 坪井 百合子



新型コロナウイルス感染症予防のため、イレギュラーなことの連続でスタートした令和2年度も、気付けばもう半ばを過ぎました。本校に勤務して1年足らずではありますが、初生地区に勤務するのは4年目となります。というのも、私の前任校(園)が「初生幼稚園」だったからです。

すぐ隣の幼稚園からの異動…私に課せられたキーワードは『つなぐ』ことだと考え、下記の3つの『つなぐ』役割を果たすべく、日々過ごしてきました。

① 職員をつなぐ

校長先生の経営方針の下、職員が分掌、年齢、経験年数、家庭状況に関係なく自分の思いを伝え合えるような風通しのよい職場環境づくりを目指しています。そのためには、核となる基幹的職員を正しく見極める必要性があることを実感しました。

② 地域と学校をつなぐ

コミュニティスクールの導入に向け、学校支援コーディネーターやCSディレク

ター選任のための情報収集に努めました。3年前からの地域のつながりを活かし、地域と学校が共生していくためのつなぎ役としての一翼を少しでも担えたらと思います。

③ 幼稚園と小学校をつなぐ

自分の肌で感じてきた就学前の3年間の成長や幼児教育の大切さを小学校での6年間の学びにつなげたいと考えました。令和元年度に、浜松市こども家庭部幼児教育・保育課から示された「幼児期に育てたい力」について、1年担任と一緒に話し合う機会を設けました。幼小のスムーズな連携だけでなく、9年間を見通した教育の大切さを全職員にも機を捉えて伝えていきたいと思います。



未だに廊下ですれ違う子供たちに、「園長先生！」と元気よく呼ばれることがあります。初めの頃は「今度は、教頭先生って言うんだよ。」と声を掛けて訂正していましたが、最近ではその呼称に懐かしささえ感じるようになりました。

温かい地域の方々、保護者、職員そして、子供たちに支えられながら、何とか年度の後半に突入しました。初めてのことを楽しみながら生きる余裕は、まだありませんが、一歩ずつ自分らしく愚直に歩んでいきたいと思う今日この頃です。

「今できる中で、精一杯取り組む」

浜松市立金指小学校 鈴木 啓二

金指小学校は、引佐地区の玄関口にあたり、小高い山の上に立つ学校です。毎朝子供たちは、急な「さかみち」を登って登校してきます。学校の行事や活動、部屋にも、「さかみち」という言葉が使われています。学校の裏には、「実相の森」という森があり、自然に囲まれた学校です。保護者や地域の方も学校のことを大切にしてくれます。



そんな金指小学校に、新任の教頭として赴任して半年が過ぎました。赴任当初は、私自身、9年ぶりの小学校の現場である中で、コロナウイルスの対応のための休業も始まり、戸惑うことが多くありました。学校再開後も、感染症対策をどこまでやるのか、子供や職員の健康をどう守るのか、行事や日常の活動を縮小して子供のモチベーションをどう保つのかなど、悩むことがいっぱいありました。

そんな中、校長先生から「コロナの状況の中でも『今できる中で、精一杯取り組む』』ということを職員が共通理解し、子供と共有していきましょう。」という言葉がありました。決して今までと同じにはならないことを諦めるのではなく、その中で工夫して価値あるものをつくっていくということです。

早速、情報主任を中心に「G Suite」を使って、家庭と双方向通信ができるまで進めました。また、6年担任を中心に、東京に行けなくなり県内中心になった修学旅行を、旅行業者と協力して子供たちに行程を考えさせる取り組みを行いました。教頭として相談にのったり、少しではありますが助言することができたかと思います。

教頭の役割の中心は、校長先生の方針の下、組織の要となって組織を動かしていくことだと思います。コロナ禍がまだまだ続いていく状況の中で、常に「今できる中で、精一杯取り組む」という意識をもち、新しい考えを取り入れながら職員と共にこれからの金指小学校をつくっていききたいと思います。